過ぎた思い遣りは、疎外感や孤立感を抱かせ兼ねない

障害児とその母親に係わり合う職についているメル友から、次のようなメール。

【　先月、出産した友達に出産祝いを贈ったら、「先天性の障害が足にあり、内反足だったの。ショックだった。」とのメール。

話してくれたことに感謝しながら、ちょっと心配。どのような様子なのか、今は詳しくはわからないものの、その友達の気持ちを聞きながら、会いに行こうと思っています。

今の仕事をしているからこそ、どう、言葉をかけようか、どう、これから係わり合おうか、深く考えてしまいます。周りの人の係わりいかんによっては、その人の気持ちって大きく変わってくることを知っているだけに、どう、寄り添うかと思います。

やっぱり、仕事でお母さんと係わり合っていることも、友人への心の寄り添いも、気持ちは一つかな？

いつかは、笑顔になってほしい！それだけですね。そうなるために、自分はどうするか！これのみ！　】

厚かましく次のように返信をした。

【　深く考えないように、あなたなりの自然体で十分！

あなたはその母親の友人！まずはそこのところで、寄り添えばいいと思います。何も、障害児の母親にプロとして寄り添うことを、そうそう意識しなくてもいいと思います。

障害児の母親がホッし、我に帰る瞬間は、セールスの電話の時とか。先方は、「自分を障害児をもつ母親と知らず、一人の一般人、一人の女性として会話してくるから」とのこと。

この話は、ある本質を突いていると思います。

障害児を産み育てている母親ということで、周りは思い遣りからか余りにも意識し過ぎ、日常の声かけや誘いを遠慮したり、気の使い過ぎのことが多いように思います。

これでは、母親は益々「自分は障害児の親」ということを意識せざるを得ず、ある枠から出られませんよね。

配慮は必要ですが、過ぎた優しさは、時に母親に疎外感や孤立感を抱かせ兼ねません。

親子関係においても、双方向性の視点が大事と思います。

あなたがいうように、笑顔ある母親に、子どもは育児して欲しいですよね。

ですから、あなたは友人としてまず寄り添えばいいと思います。その係わり合いの中で、友人が我が子の障害について何かを聞いてくれば、プロであるあなたなりのアドバイスをすればいい話。

こうした寄り添い方、係わり合い方もありますからね。　】

（2005 年 7 月 27 日　記）